

令和 5 年 6 月 17 日現在

機関番号：32620

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K16527

研究課題名（和文）障害者スポーツ文化のライフヒストリー的研究 パラリンピック東京大会のレガシー

研究課題名（英文）The Historical approach of Disability Sports Culture - The Legacy of the Tokyo Paralympic Games

研究代表者

渡 正 (WATARI, Tadahsi)

順天堂大学・スポーツ健康科学部・准教授

研究者番号：30508289

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の障害者スポーツの歴史と変化を考察することを目的とする。特に以下の3つの点に焦点化した。まず、太平洋戦争中において傷痍軍人のリハビリとしてのスポーツを把握し、1964年パラリンピックとの関係を検証した。次に、1964年パラリンピックに参加した人々へのインタビュー調査を実施し当時の状況を明らかにした。最後に、日本の障害者スポーツの歴史と変化を、続く1970年代という日本の障害者スポーツの草創期との関連および他の社会的状況と比較しながら検討することである。このことを通して日本の障害者スポーツの歴史について社会的・制度的・経済的な観点から記述することを目的とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で明らかになった成果の学術的意義としては次の点を挙げるができる。それは、これまで見過ごされてきた戦前の障害者（傷痍軍人）に対するリハビリテーションとしてのスポーツ活動が活発に行われてきたこと、そしてその傷痍軍人とスポーツのつながりは1964年のパラリンピックまでには払拭され不可視化されていたことの指摘である。一方社会的意義としては、戦前からの連続性を考慮した上で、1964年の関係者の証言をアーカイブできたことである。特にこれまでの研究や書籍では取り上げられてこなかった人々へのインタビュー記録は、当時の状況を知り伝えていくという意味で重要な試みだったと言える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine the history and transformations of disability sports in Japan. In particular, we focused on the following three points. First, sports as a form of rehabilitation for injured soldiers during the Pacific War was understood, and its relationship to the 1964 Paralympics was examined. Second, interviews with those who participated in the 1964 Paralympics were conducted to clarify the situation in Japanese society at that time. Finally, the history and transformation of sports for the disabled in Japan will be examined about the early days of disability sports in the 1970s and in comparison with other social conditions. Through this, we aimed to describe the history of disabled sports in Japan from social, institutional, and economic perspectives.

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：パラリンピック 歴史 ライフヒストリー 傷痍軍人とスポーツ

## 1. 研究開始当初の背景

2020年夏季オリンピック・パラリンピックの開催にともなって、オリンピック・パラリンピックのレガシーが社会的な関心を集め、1964年東京大会や1998年長野大会がどのようなレガシーを残してきたかが改めて問われている。2020年招致にむけたプレゼンテーションでは佐藤真海選手が登場し、車いすテニスプレイヤーの国枝慎吾選手は国民栄誉賞を受賞した。こうしたことから、障害者スポーツに対する注目は高まっている。しかし、この両者が交わる地点である障害者スポーツ/パラリンピックのレガシーについては、さほど注目が払われていないのが現状である。日本におけるオリンピックのレガシーについては、長野大会に着目した社会学的な研究(石坂・松林, 2013)があるが、その中においてもパラリンピックのレガシーについてはほとんど検討されていないのが現状である。

一方、スポーツ現象を離れ、我が国における障害者がどのような「生」をきたか、当事者の視点から検討するアプローチが注目され、これまでに多くの検討がなされてきた。そのなかで、1960年代、1970年代以降の障害当事者による社会運動(安積ほか, 1990 田中, 2005)は、現代から見れば、障害者のピア・グループによる社会問題化の運動だったと捉えられている。さらに近年では、これまで学術的にも語られてこなかった障害者の「生」や運動を記述することで、現在における問題を考察する研究が注目されている(山下, 2008 立岩, 2013 立岩, 2014)。また、社会学においてもライフヒストリー的研究が再び注目され、その方法論的見直しとその有効性が再確認されつつある(岸, 2013)。こうした背景には、これまで記述されてきた公的な歴史や概念の視野の「狭さ」に対する認識があり、より多様な1人ひとりの「合理性」を捉えきれていないという反省がある。

これらの観点からすると、「1964年のパラリンピック東京大会を契機として開始され、その遺産によって発展してきた」という、我が国における障害者スポーツの歴史の記述は間違っているわけではないが、明らかに単純すぎるだろう。そこで本研究はこれまでの研究を継続・発展させることを企図し、我が国の障害者スポーツ体制をより多くの当事者の視点から捉え直すことが必要だと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、1964年のパラリンピック東京大会を契機に成立し、1998年のパラリンピック長野大会で集大成を迎えたとされる日本における障害者スポーツ体制について、障害者スポーツの当事者たちが、一体どのような社会的・制度的・経済的な状況のなかで活動していたのかを考察することを目的とする。特に以下の3つの点に焦点化して行う。

- (1) 日本の障害者スポーツの歴史はその多くは1964年を巡る動きから書き出すが、太平洋戦争中において傷痍軍人のリハビリとしてのスポーツが行われていたことがわかっている。この点についてそのあり様を把握するとともに戦後、特に1964年パラリンピックとの関係を検証する。
- (2) 1964年パラリンピックについて選手や語学奉仕団のような関係者はどのように活動に参加し、実際に大会期間中を過ごしたのか。また、パラリンピックがその後の人生にどのような影響を与えたのかを人々へのインタビュー調査から検討する。
- (3) 1964年のパラリンピックの影響を強くうけている日本の障害者スポーツの歴史と変化を、続く1970年代という日本の障害者スポーツの草創期との関連および他の社会的状況と比較しながら記述する。

## 3. 研究の方法

我が国における障害者スポーツの体制と歴史を当事者のライフヒストリーから検討するため、本研究では、(1)インタビュー調査による対象者の生活史の記述、(2)文献調査による各時代の出来事の収集が主な方法となった。

## 4. 研究成果

上記の研究目的と関連してそれぞれ成果は以下のように捉えることができる。なおこれらの研究成果については、遅くとも2024年中に出版する予定である。

### (1) 戦前の傷痍軍人とスポーツ

Ian Brittain (2016)によれば、パラリンピック・ムーブメントの国際化には、世界歴戦者連盟(World Veterans' Federation: WWF)の役割が大きかったという。しかし、多くの日本の障害者スポーツやパラリンピックの文脈においては、こうした戦争および傷痍軍人の存在はほとんど語られてこなかった。しかし、戦争中に傷痍軍人に対するリハビリ的スポーツの実施があったことは、高嶋(2015)などでも指摘されていた。本研究はこうした指摘について改めて資料を調査することから裏付けを行った。当時、軍医少佐であった中村は「戦傷兵とスポーツ」『體育日本』(1938, 16巻10号)において「事変の進展とともに、今後益々増加を予想される傷病兵が、

再び以前の身体にもどるためには運動が絶対的に必要で、この点むしろ健康者以上に考慮されねばならぬのである」と記述しており、傷痍軍人に対するリハビリテーションとしてのスポーツ活動の重要性が指摘されていた。こうした活動の報道は 1939 年から 1943 年までの期間に限られていた。

さらに、傷痍軍人とスポーツの関係では 1964 年の出場者である青野繁夫氏が傷痍軍人であったことが判明している。こうした点からも戦前から 1964 年の大会には連続と断絶が存在した。例えば青野は国立箱根療養所の入所者であるが、ここは戦中の臨時東京第一陸軍病院に入院していた脊髄損傷者を収容した療養所であり、これらは連続性のなかにあると捉えられる。青野は 1964 年大会において選手宣誓をしている。その宣誓文とほぼ同じ内容が、彼が寄稿した『日傷月刊』(1964, 日本傷痍軍人会編)に掲載されているが、両者を比べると、寄稿文から傷痍軍人であることが理解できる文・語を除いたものが選手宣誓文になっていることが判明した。その他の報告書・新聞記事等にも青野が傷痍軍人であったことは報告されておらず、事情はともあれ青野が傷痍軍人であったことは 1964 年大会では注意深く取り除かれており、戦争とスポーツの断絶が存在していることがわかった。

## (2) ライフヒストリー

本研究では、コロナ禍による中断やなどを含みながら、1964 年の大会に出場した選手と大会で語学奉仕団として関わった人々、64 年以降の草創期に活動した人々にインタビュー調査を行った。今回の研究期間にインタビューを行ったのは以下の通りである。

- ・1964 年出場者 4 名 (うち第 2 部出場者 1 名を含む)
- ・大会語学奉仕団 7 名
- ・草創期の関係者 2 名

これらのインタビュー対象者にはこれまで明らかにならなかった箱根療養所や大分別府病院以外の選手や第二部の選手も含んでおり、一定の成果を得られたといえる。こうしたインタビューは今後も行う予定である。これらインタビュー記録はアーカイブし今後出版予定の書籍において、今後の研究に資するよう公開の手続きを進めていく。

## (3) 1964 年のレガシー

1964 年のパラリンピックのレガシーはいかに考えられるだろうか。本研究の成果から、この大会は個人レベルにおいて、この大会に関わった経験は、障害者は主体的で自律的な個人であって良いことを理解させるような、「障害者観の転換」ともなった。特にそれは、明るい外国選手とおとなしい日本人選手の対比から想念されていた。すなわち、個人レベルでの「善いこと」として、パラリンピックがあったといえる。一方で、欧米との対比の背景には、社会復帰率の欧米との差、日本の後進性の自覚がある。これは、パラリンピックを正当化する公的な言説の根拠ともなった。すなわち、個人レベルの「善さ」と社会レベルの「効用」が共犯をもって、機能したといえる。このようにパラリンピックの正当性が、「社会復帰」に焦点化されたことは、スポーツ実施の目的として、更生援護(可能なもの)の重視という視点を強く持つことになった。これは、ある面では、職業能力や生活能力の回復による社会・経済活動への復帰 = 重度者の切り捨てともなる。そのため 1960~70 年代の障害者の権利獲得運動等の当事者運動と、スポーツ文化との断絶を作り出すことになり、その後のパラリンピック / 障害者がスポーツをする体制の性格を水路づけたと考えられることが明らかとなった。

### < 引用文献 >

- 安積純子ほか, 1990, 『生の技法』藤原書店
- Brittain, I, 2016, The Paralympic Games Explained 2nd ed.
- 稲泉連, 2020 『アナザー1964 パラリンピック序章』小学館.
- 石坂友司・松林秀樹, 2013 『<オリンピックの遺産>の社会学』青弓社.
- 岸政彦, 2013 『同化と他者化: 戦後沖縄の本土就職者たち』ナカニシヤ出版.
- 佐藤次郎, 2020 『1964 年の東京パラリンピック すべての原点となった大会』紀伊國屋書店.
- 高嶋航, 2015 『軍隊とスポーツの近代』青弓社.
- 田中圭太郎, 2020 『パラリンピックと日本 知られざる 60 年史』集英社.
- 田中耕一郎, 2005, 『障害者運動と価値形成』現代書館.
- 立岩真也, 2013 『造反有理: 精神医療現代史へ』青土社.
- 立岩真也, 2014 『自閉症連続体の時代』みすず書房.
- 渡正, 2018 「パラリンピックの開催 パラリンピックが生んだもの」, 石坂友司・松林秀樹編『1964 年東京オリンピックは何を生んだのか』青弓社.
- 山下幸子, 2008 『「健常」であることを見つめる』生活書院

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 渡 正
2. 発表標題 日本における障害者スポーツ/パラリンピックの歴史と課題
3. 学会等名 日本史研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tadashi WATARI
2. 発表標題 The Representation of the Paralympic Games in Japan
3. 学会等名 International Sociology of Sport Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tadashi WATARI
2. 発表標題 How did the Paralympic Games be imagined in Japan? From discourse analysis focusing on media coverage.
3. 学会等名 European College of Sport Science (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡 正
2. 発表標題 1964年のパラリンピック東京大会における忘却と不連続
3. 学会等名 日本スポーツ社会学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 前鼻啓史, 渡正, 鈴木宏哉, 渡邊貴裕
2. 発表標題 パラリンピック教育の概念と実践に関する予備的研究
3. 学会等名 障害者スポーツ関係学会合同コンgres
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡 正
2. 発表標題 パラリンピックの報道をめぐるテキスト分析～1964年と2016年の比較を中心に
3. 学会等名 日本スポーツ社会学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 渡 正 (櫻田 美雄、小川 伸彦編)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 360
3. 書名 当事者宣言の社会学 (第2章「障害者スポーツの中の未来」担当)	

1. 著者名 渡 正 (日本スポーツ社会学会編集企画委員会 編集)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 創文企画	5. 総ページ数 266
3. 書名 2020東京オリンピック・パラリンピックを社会学する 日本のスポーツ文化は変わるのか (第7章「障がい者スポーツにもたらされるべき変化とは」担当)	

1. 著者名 渡 正 (石坂 友司、松林 秀樹編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 256
3. 書名 一九六四年東京オリンピックは何を生んだのか (第5章「パラリンピックの開催」担当)	

1. 著者名 渡 正 (齊藤まゆみ編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 153
3. 書名 教養としてのアダプテッド体育・スポーツ学 (第22講「日本のパラリンピックとレガシー」担当)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------